

TACT/FESTIVAL2018

ブランカ・リー

ソルスティス

「Solstice—夏至／冬至」

大自然に響く、ダンスの鼓動

人はなぜ踊るのか？ 人は何を踊るのか？
かつてない迫力の映像による大自然のスペクタクルと、
スペインが生んだパワフルなダンスが、
生命のレベルで融合する！



photo:Nico Bustos

「とんでもないこと」が巻き起こる舞台

ゴールデンウィークに家族で楽しめる舞台芸術作品を紹介してきたタクト・フェスだが、今回は、舞台上がどエライことになる！

火山が噴火して溶岩は飛び散るし、荒れ狂う大海原、逆巻く暴風に雷雲が襲う……しかし次の瞬間には、シンと静まりかえった、ただただ真っ白い空間となる。数々の光景は巧みな演出でプロジェクション・マッピングの映像が映し出したものなのだ。しかしとにかくスケール感と迫力がケタ違いなのである。とくに上空に配置された波打つ白い布が可動式で、時に雲のように、波のように、そして山脈のように見え、視覚効果を何倍にも高めている。劇場全体が、巨大なヴァーチャル空間に変貌するのである。

といってもこれは映像アトラクションではない。スペインを代表するブランカ・リーの振付演出による「ダンス公演」なのだ。

じつは「映像を使うダンス作品」が、作品として成功するのは意外と難しい。その最大の原因はしごく単純なことで、要は「映像は、人間よりもデカい」ためである。映像が小さければ遠い席からは見えない。といって背景の壁いっぱいに映し出してしまうと、人間の身体は大きな映像の中に埋もれてしまって、ダンス公演の意味がなくなってしまうのだ。

しかしこの作品は、見事に突き抜けている。

14人のダンサー達は、はじめ肌色の薄い衣装で静かに踊っているのだが、やおら舞台を踏みしめて身体を叩いて音を出す、迫力のボディ・クラッピングを始めるのだ。繊細に、そしてダイナミックな動きがほとばしる。それはただ

技術があるとかダンスが上手いというだけではない。ダンスが誕生した根源に迫るような、原始的なエネルギーに満ちたダンスである。圧倒的な映像の後でも、ブランカ・リーのパワフルな振付は、鍛え抜かれたダンサーの魅力を深層から引き出してみせる。

中盤に出てくる衣装も、単に身体を覆うのではない。振付のパワーを増幅し、ダンサーの身体存在感を拡張していくような独特のアイデアが施されており、これも必見である。

音楽はライブの演奏がダンスを加速する。野性味あふれるパーカッションに声。人間と大自然をつなぐような律動が、舞台をどンドン満たしていく。

人間と自然について、話したくなる

本作の冒頭でダンサー達は透明なプラスチックの箱のようなものに閉じ込められている。ずいぶんと窮屈そうだが、われわれの日常は案外そんなものかもしれない。だが日々を過ごしていれば、そこが世界の全てだと勘違いしてしまいがちだ。人間の生活は自然との共存無しには成り立たないが、環境への取り組みは遅々として進まない。バランスを失ったとき、牙を剥いて襲いかかってくる自然の力の巨大さを、この作品は教えてくれるだろう。同時に、人間にはまだ世界を取り戻す力があることも示してくれる。無条件に楽しいスペクタクルであると同時に、見た後は人と語り合いたくなる作品なのである。

そしてタクト・フェスの常連、劇団コープス「ひつじ」が今年もやってくる。劇場内の広場に、突如現れる木の柵と芝生。「ひつじ」達は超リアルなので、本物の羊同様、特別なことはしない。観客に愛想も振りまかない。そのかわり、羊がすることは大抵やる。鳴く・飲む・草を食べる、そしてもちろんウンコやおシッコも例外ではない。無愛想だが大人気。まだ見たことがない人は、ぜひとも体験して欲しい。

文：乗越たかお NORIKOSHI TAKAO (作家・ヤサぐれ舞踊評論家)



photo:Laurent Philippe

ソルスティス 「Solstice—夏至／冬至」

詳細はP14へ

振付・演出：ブランカ・リー
6月29日(金)～7月1日(日) プレイハウス

劇団コープス「ひつじ」
6月29日(金)～7月1日(日) ロワー広場

詳細はHPへ

ひびのこづえパフォーマンス「WONDER WATER」
6月30日(土)～7月1日(日) ロワー広場

詳細はHPへ

※田中浜パフォーマンス「場踊り」も同時期上演予定
チケット発売：4月21日(土)